

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 28 日現在

機関番号：23803

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24720341

研究課題名(和文) ビザンティン・ヘシカズムの歴史的研究 東方キリスト教神秘主義の起源と展開

研究課題名(英文) A historical study of Byzantine hesychasm: origins and development of eastern Christian mysticism

研究代表者

橋川 裕之 (Hashikawa, Hiroyuki)

静岡県立大学・国際関係学部・講師

研究者番号：90468877

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究はビザンツ帝国のキリスト教、すなわち正教の信仰生活に関連して成立した、ヘシカズムと呼ばれる神秘主義について、その起源と展開の解明を目指したものである。本研究の主たる成果は、心身技法をともなう形式の神秘主義的霊性がアトスのニキフォロスによりテキストにおいて定式化された13世紀半ばよりも前に、何らかの、具体的には明かされない神秘主義的実践の伝統があったことを示した点にある。

研究成果の概要(英文)：This study aimed at elucidating the obscure origins and later development of so-called Byzantine Hesychasm, which was shaped in the religious life of Byzantine Orthodox Christianity. One of my main results is that I documented a continuation of some sort of mystical tradition, whose participants carefully had avoided specifying its psychosomatic method until it was first written down for instructive purpose by Nikephoros the Athonite in the mid-thirteenth century.

研究分野：西洋史学

キーワード：ヘシカズム 正教会 グリゴリオス・パラマス アトスのニキフォロス シナイのグリゴリオス 神秘主義 ミハイル・プセロス 新神学者シメオン

1. 研究開始当初の背景

ヘシカズム hesychasm という語は、静寂を意味するギリシャ語、ヘーシュキア hesychia に由来し、もともとは古代末期の地中海東方において、神と合一することを目指した修道士の霊性を意味する。人間の神化は東方キリスト教の基本概念の一つであり、この神秘主義的な伝統はビザンツ帝国において途切れることなく続き、ビザンツ滅亡後も正教修道士の世界で生き続けている。学界で「ビザンティン・ヘシカズム」と一般に称されているのは、13世紀のビザンツで定式化された、神秘的合一を成すための独特の身体技法をともなう祈りの実践ないし霊性である。正教の聖地、アトス山で多くの実践者を得たヘシカズムは、やがてビザンツ国内で、ヘシカスト論争と呼ばれる熾烈な神学論争を引き起こしたが、14世紀半ば、コンスタンティノーブルで開催された複数の教会会議をへて、ビザンツ教会の正統な霊性であることが確認された。

今日のビザンティン・ヘシカズム研究は、おもに二つの方向にそって展開してきた。一つは文献学であり、これまでにヘシカストの擁護者グリゴリオス・パラマスの著作を始め、数多くのギリシャ語校訂版が刊行されている。もう一つは神学であり、パラマスとその論敵バルラムを含む多くの修道士や知識人が関与したヘシカスト論争の個々の論点や問題への理解がこの半世紀で大幅に進化したと言える。こうした研究の流れに対して、本研究が目指すのは、ビザンティン・ヘシカズムに積極的に関与した人物と、当時のビザンツおよび正教スラヴ世界とのかかわりを明らかにすること、別の言い方をすれば、パラマスやシナイのグリゴリオスといった、ヘシカズムの擁護者であり実践者でもある人々と、ビザンツおよび正教スラヴ世界の政治・文化的コンテクストとの相互作用を分析することである。なぜこうした視点が必要であるかと言えば、主要なヘシカストたちの思想や活動がよりクリアに理解されるようになった反面、ビザンティン・ヘシカズムの起源と展開の問題がいまだ十分には解明されていないためである。ヘシカズムを一つの歴史的運動ないし現象としてとらえるなら、その霊性の担い手となった人々のネットワークと、彼らが世俗の権威や教会組織と取り結んだ関係を一次資料に即して考察することが不可欠である。

2. 研究の目的

本研究は、東ローマ/ビザンツ帝国において生起し、今日の東方キリスト教/正教の霊性を形成する一因となった神秘主義、いわゆるビザンティン・ヘシカズムについての歴史的研究である。ビザンティン・ヘシカズムは13世紀以降、ビザンツの一部修道院を発信源として、ビザンツのみならず正教スラヴ世界にも急速に普及し、コンスタンティノーブル

総主教を頂点とする正教会の構成とその神学に多大な影響をおよぼした。本研究は、ビザンティン・ヘシカズムを東方キリスト教世界における一つの霊的運動にとらえ、それが13世紀にビザンツに生起し急速な発展を遂げた要因およびプロセスを、同時代の写本・記述史料に即して、多面的・包括的に把握することを目的とするものである。

3. 研究の方法

本研究は相互に関連する複数のテーマの考察から構成されている。ビザンティン・ヘシカズムの起源、グリゴリオス・パラマスとその人的ネットワーク、シナイのグリゴリオスとヘシカズムの正教スラヴ世界への流布、そしてビザンツにおけるヘレニズム的伝統とキリスト教的伝統の関係である。ビザンティン・ヘシカズムの研究はこれまでおもに文献学と神学の領野で進められているが、代表者が志向するのは文献学でも神学でもなく、歴史研究である。具体的な方法としては、まず、未刊行の写本を含む、複数言語の記述資料を代表者の所属機関および現地の図書館において網羅的に読解する。次いで、ビザンティン・ヘシカズムの研究に携わる国内外の研究者と積極的に意見交換し、理解のさらなる深化を図る。これらの方法によって、ビザンティン・ヘシカズムの生成を可能ならしめた要因ないし条件とそれがビザンツと正教スラヴ世界に流布したプロセスを包括的に把握することを目指す。

4. 研究成果

(1) ビザンティン・ヘシカズムの起源

呼吸および姿勢への注意が神秘的境地の獲得のために払われることから、ヨガとの類似も指摘されるヘシカズムの起源(具体的にいつ、いかなる経緯でビザンツの修道士らによって支持、実践されるようになったのか)について、これまで確たる証拠は提示されておらず、定説的な見解も存在していない。代表者はまずイタリアの史家アントニオ・リゴの研究を手掛かりとして、14世紀の半ばに長大な歴史書をあらわした俗人学者ニキフォロス・グリゴラスの著述を検討し、グリゴラス自身は従来の神秘的伝統とは明白に一線を画する新たな実践ないし霊性が出現したと、つまりその実践は正教の伝統からの明らかな逸脱であると理解していたことを確認した。ついで代表者は、グリゴラス以前のビザンツの霊的テクストを集中的に検討し、以下の暫定的な結論に達した。すなわち、13世紀後半より前の時期では、アトス山でヘシカズムを指導したとされる修道士ニキフォロスのほかに、身体技法を祈りに取り入れたうえで神秘的境地を目指した著名な修道士は一人も確認されず、ヘシカズムの起源については、イタリアからアトスに到来したと伝えられるニキフォロスが独自に身体技法を考案したが、ニキフォロス以前に一部の修道士

らが非公式にその方法を編み出し、テキストに記すことなく、口伝によりそれを実践、継承していたかの、いずれかの可能性が有力ということである。

ビザンティン・ヘシカズムの革新性は、修道生活と密接に関連した「イエスの祈り」の連祈に、独特の身体技法が組み合わされた点にあった。この神秘主義的实践としてのヘシカズムがビザンツの修道士世界で流行し始めたとされるのは 13 世紀後半であるが、10 世紀から 13 世紀にかけての諸史料、とくに新神学者シメオンとその師父ストゥディオスのシメオン、11 世紀半ばの神学者ニキタス・ステイタトス、12 世紀半ばの修道士ヤコボス、13 世紀半ばの修道士マルコスの著作を分析した結果、11 世紀前半のストゥディオス修道院と新神学者シメオンのサークルを中心に、神秘的境地への到達が重視されていたことが確認された。しかし、この段階ではいかなる史料にも「方法」は言及されず、「イエスの祈り」と神秘的境地とのはっきりとした関連も見出せない。一方、修道士マルコスが記した修道生活のための手引的なテキストからは、彼が「イエスの祈り」の連祈を重視していたことが読み取れた。これらの分析から、代表者は、アトスのニキフォロスが定式化したビザンティン・ヘシカズムの背後に、定式化もテキスト化もされなかった、ごく限られた修道士によるヘシカズム実践の伝統があった可能性が高いという結論に達した。

(2) グリゴリオス・パラマスとシナイのグリゴリオス

イタリアのカラブリア地方出身の修道士バルラムによる強い批判に対し、ヘシカズムの実践者として神学的弁証ないし正当化を試みたのはグリゴリオス・パラマスであるが、パラマスの思想的発展を通時的に把握する課題の一環として、彼が 1354 年にオスマン朝の捕虜になった時期に執筆した書簡を分析し、彼がビザンツ帝国の衰退を神の意思として解釈し、帝国なき社会における信仰の持続を想定していたことを明らかにした〔図書〕の論文〕。3 年を期間とする本研究において、時間的・エフォートの制約から十分な検討を加えることができなかったのが、パラマスの思想および彼と同時代のヘシカストラのネットワークをめぐる問題である。これらの課題はパラマスの書簡・著作の翻訳と合わせて、別個に追究するつもりである。なおビザンティンとスラヴ世界の関係において、コンスタンティノーブルの特定の修道院と、典礼の方式と修道士の生活を定めた書物(ティピコン)が果たした役割を考察した拙稿「コンスタンティノーブルのストゥディオス修道院とルーシの修道士 正教文化の伝播について」が刊行予定である(小澤実・長縄宣博編『北西ユーラシア歴史空間の再構築』北海道大学出版会)。

(3) キリスト教的伝統とヘレニズム的伝統の關係

ビザンティン・ヘシカズムをめぐる諸事象は、ビザンツにおけるキリスト教的伝統と非キリスト教的ないしヘレニズム的伝統との關係を背景として理解される必要があり、近年では、11 世紀に学者や政治家として活躍したミハイル・プセロスが神秘主義的な実践に関心を示していたことも指摘されている。代表者は村田光司(名古屋大学大学院文学研究科博士後期課程在籍、日本學術振興会 DC)の協力を得て、本心からのキリスト教徒であったのか否かで研究者の見解がわかれている、6 世紀の歴史家ケサリアのプロコピオスの『秘史』の翻訳および註作成に取り組み、計 30 章ある全体を 3 部にわけて『早稲田大学高等研究所紀要』に発表した〔雑誌論文〕の、 、 、 関連して〔学会発表〕の)。これはわが国におけるプロコピオス『秘史』の原典からの初の翻訳であり、ビザンツ期のギリシャ語史料の邦訳がまだ十分進展していない現状にあって、大きな意義を持つ成果であると思われる。目下、同史書の解説・翻訳・註・ギリシャ語原文を網羅した書物を刊行するための作業を進めている。またビザンツの哲学と教育制度について、コンスタンティヌス 1 世の治世から 11 世紀のミハイル・プセロスの時代までの変遷を跡づけた拙稿「ビザンツにおける哲学と制度 ミハイル・プセロスへの塞がれた流れ」が刊行予定である(上智大学中世思想研究所編『中世における制度と知』知泉書館)。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 3 件)

- 橋川裕之・村田光司「プロコピオス『秘史』翻訳と註(1)」、『早稲田大学高等研究所紀要』第 5 号、2013 年、81-108 頁、査読無
- 橋川裕之・村田光司「プロコピオス『秘史』翻訳と註(2)」、『早稲田大学高等研究所紀要』第 6 号、2014 年、77-97 頁、査読無
- 橋川裕之・村田光司「プロコピオス『秘史』翻訳と註(3)」、『早稲田大学高等研究所紀要』第 7 号、2015 年、41-70 頁、査読無

〔学会発表〕(計 2 件)

- 橋川裕之「ビザンティン・カッパドキアのコンスタンティヌスとヘレナ」、US フォーラム 2013、静岡県立大学、2013 年 9 月 27 日)
- 橋川裕之「プロコピオスの『秘史』とその歴史叙述の技法について」、US フォーラム 2014、静岡県立大学、2014 年 9 月 26 日

〔図書〕(計 2 件)

- 橋川裕之「初期オスマン社会に生きるギリシャ人 グリゴリオス・パラマスの囚われの旅と証言」、森原隆編『ヨーロッパ・「共生」の政治文化史』成文堂、2013 年、273-297

頁、査読有

ジャイルズ・コンスタブル、高山博監訳『一
二世紀宗教改革 修道制の刷新と西洋中世
社会』慶應義塾大学出版会、2014年（小澤
実、函師宣忠、橋川裕之、村上司樹訳）

〔産業財産権〕

出願状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

橋川裕之（Hashikawa, Hiroyuki）
静岡県立大学・国際関係学部・講師
研究者番号：90468877

(2) 研究分担者

（ ）

研究者番号：

(3) 連携研究者

（ ）

研究者番号：